

令和7年（2025年）の九重山の火山活動

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

火山性地震は少ない状態ですが、硫黄山付近において2025年10月頃からやや増加しており、B型地震¹⁾も時々発生しています。

噴気地帯の状況には特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。地熱域では、長期的には温度の低下や縮小傾向がみられていますが、硫黄山付近の噴気地帯地下の温度上昇（熱消磁）を示唆する全磁力の変化がみられています。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2025年中変更なし	噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）
------------	----------------------------

○2025年の活動状況

・噴煙など表面現象の状況（図1、図2、図3-1-①③）

硫黄山付近では、噴気地帯からの噴気が最高で噴気孔上200m（2024年：200m）まで上がりました。地熱域では、長期的には温度の低下や縮小傾向がみられています。

3月13日に実施した現地調査では、引き続き白色の噴気と地熱域を確認しました。前回の観測（2024年12月）と比べて特段の変化は認められませんでしたが、長期的には一部の領域（C領域）で地熱域の縮小や温度の低下がみられています。

・地震や微動の発生状況（図3-1-②④、図3-2、図4）

火山性地震の年回数は168回（2024年：79回）と少ない状態で経過しましたが、前年と比べて増加しました。火山性地震は10月頃からやや増加しています。また12月には硫黄山付近と推定されるB型地震が時々発生しました。震源が求まった火山性地震は、主に硫黄山と星生山周辺のごく浅いところから深さ3km付近及び、三俣山北西の深さ0～2km付近に分布しました。火山性微動は2006年10月以降、観測されていません。

・全磁力変化の状況（図5）

全磁力観測では、長期的に噴気地帯北側の観測点で全磁力値が増加傾向、噴気地帯南側の観測点で減少傾向が継続しています。この全磁力の変化傾向は硫黄山付近の噴気地帯地下で温度上昇（熱消磁）が起きていることを示唆しています。2023年頃から一部の観測点で、変化は鈍化しています。

1) 一般的に、火山性地震のうち、相が不明瞭で、比較的周期が長いものをB型地震と呼んでいます。火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び大分県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、2021年4月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

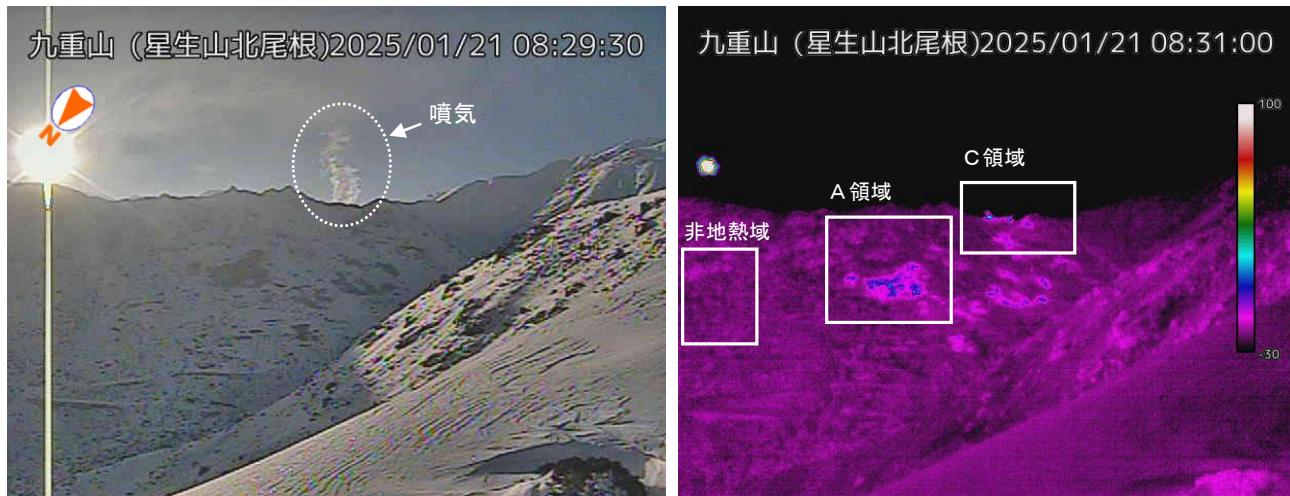


図1-1 九重山 硫黄山の噴気及び地熱域の状況（星生山北尾根監視カメラ）

<2025年の状況>

噴気地帯からの噴気が最高で噴気孔上200m（2024年：200m）まで上がりました。地熱域では、長期的にC領域で地熱域の縮小傾向がみられます。

地熱域の温度時系列

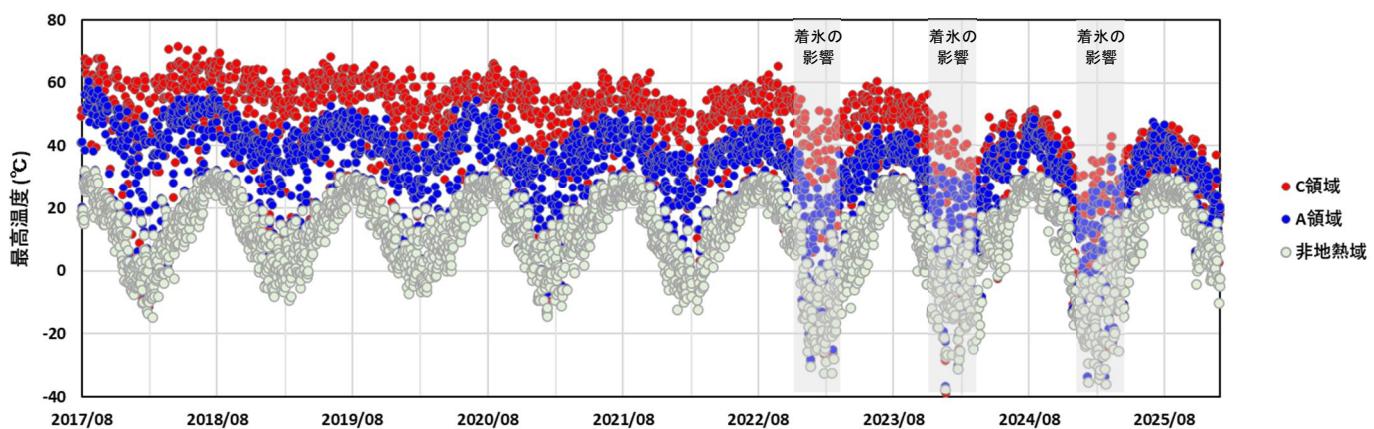


図1-2 九重山 星生山北尾根の赤外熱映像装置による日別最高温度（2017年8月～2025年12月）

<2025年の状況>

長期的に地熱域の温度の低下傾向がみられます。

毎日03時（2024年11月以降は毎日02時）の最高温度をプロットしています。

天候不良時には観測精度が低下する場合があります。

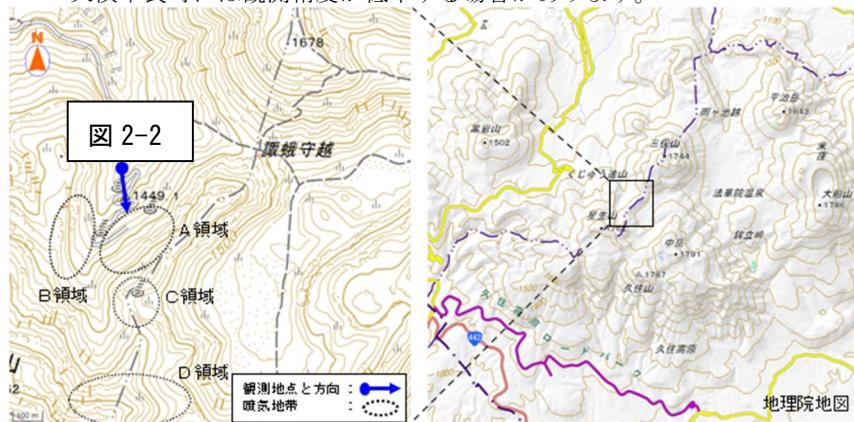


図2-1 九重山 現地調査観測位置及び撮影方向

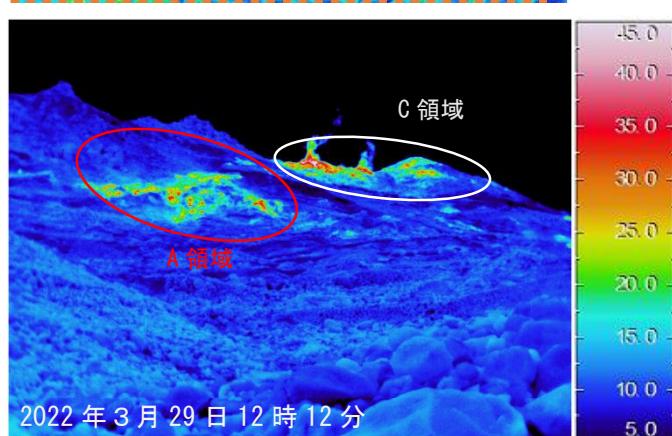
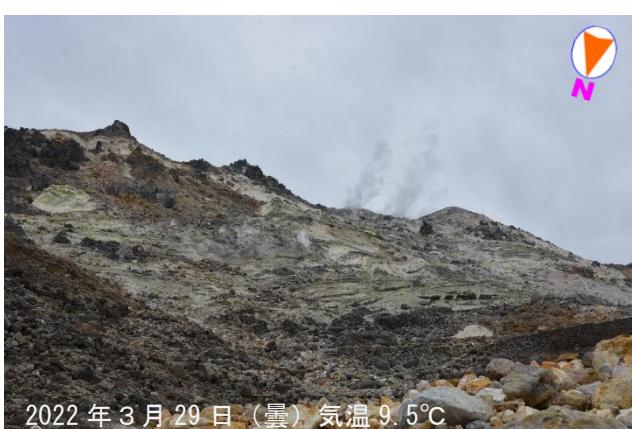
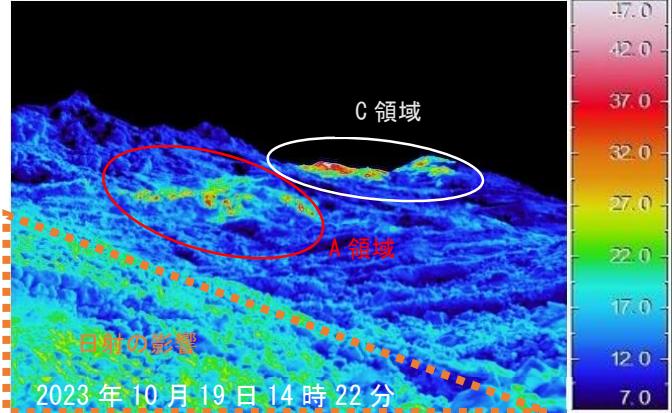
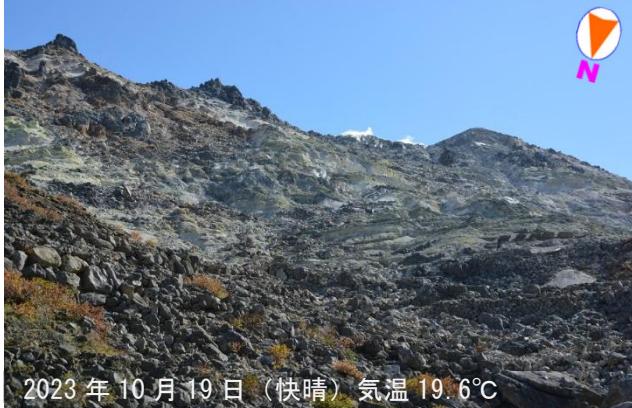
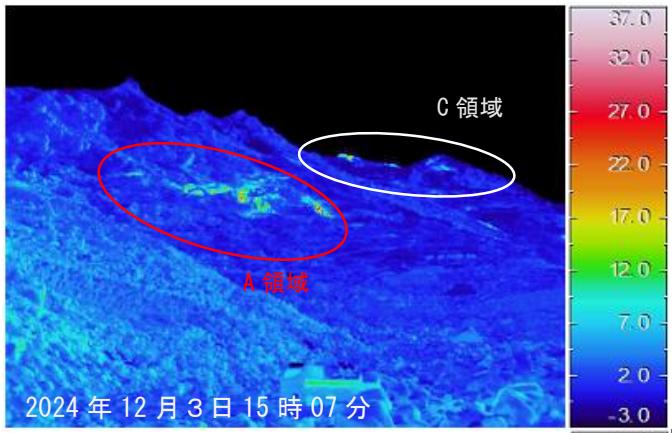
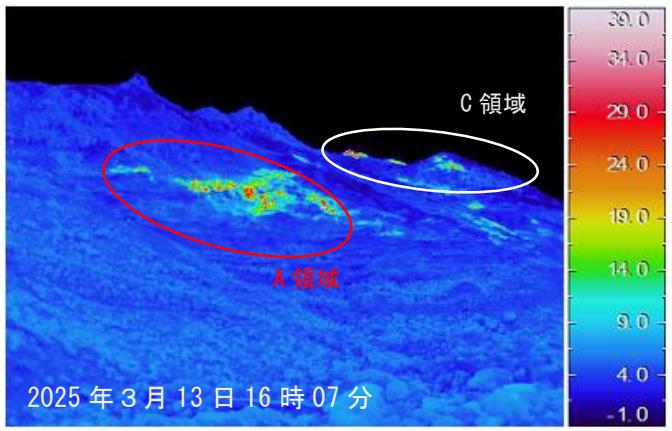


図2-2 九重山 噴気地帯A, C領域の可視画像及び赤外熱映像装置による地表面温度分布

- ・3月13日に実施した現地調査では、A領域及びC領域では、引き続き白色の噴気と地熱域を確認しました。
- ・前回の観測（2024年12月）と比べて特段の変化は認められませんでしたが、長期的には一部の領域（C領域）で地熱域の縮小や温度の低下がみられています。

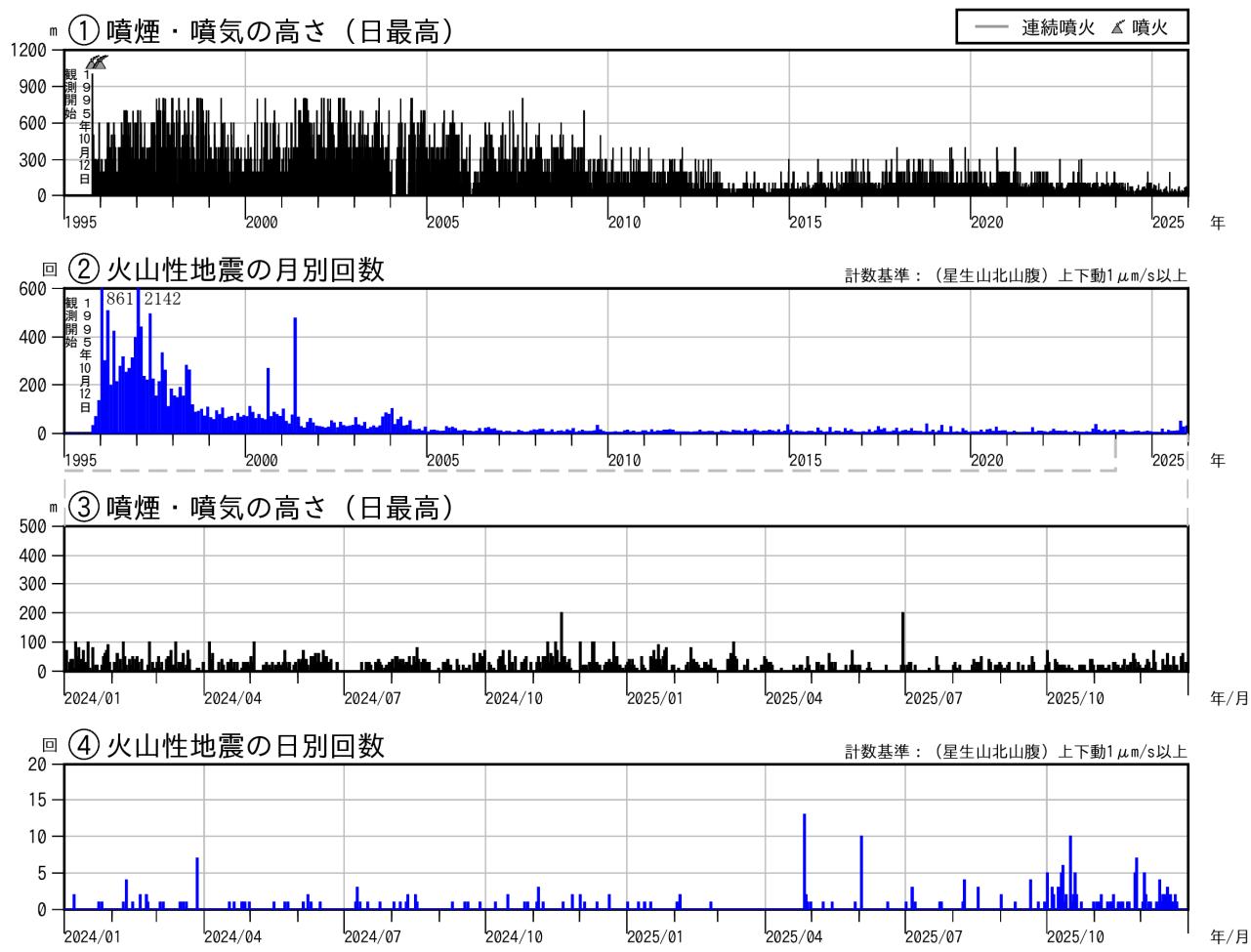


図 3-1 九重山 火山活動経過図（1995年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

- ・硫黄山付近では、噴気が最高で噴気孔上200m（2024年：200m）まで上がりました。
- ・火山性地震の年回数は168回（2024年：79回）と少ない状態で経過しましたが、前年と比べて増加しました。火山性地震は10月頃からやや増加しています。

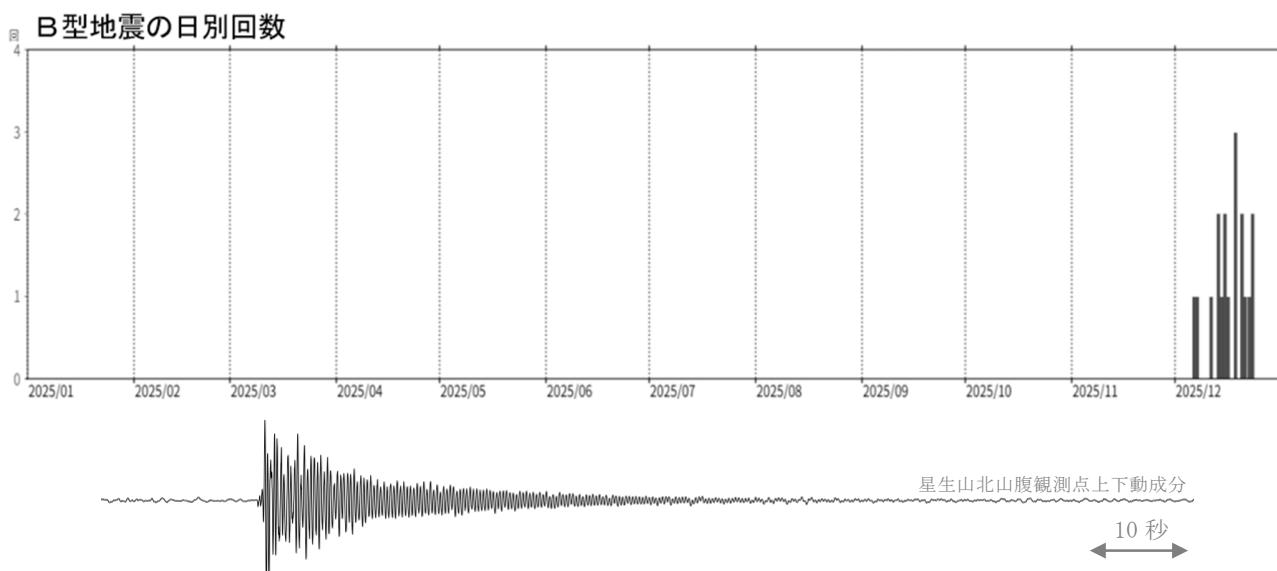
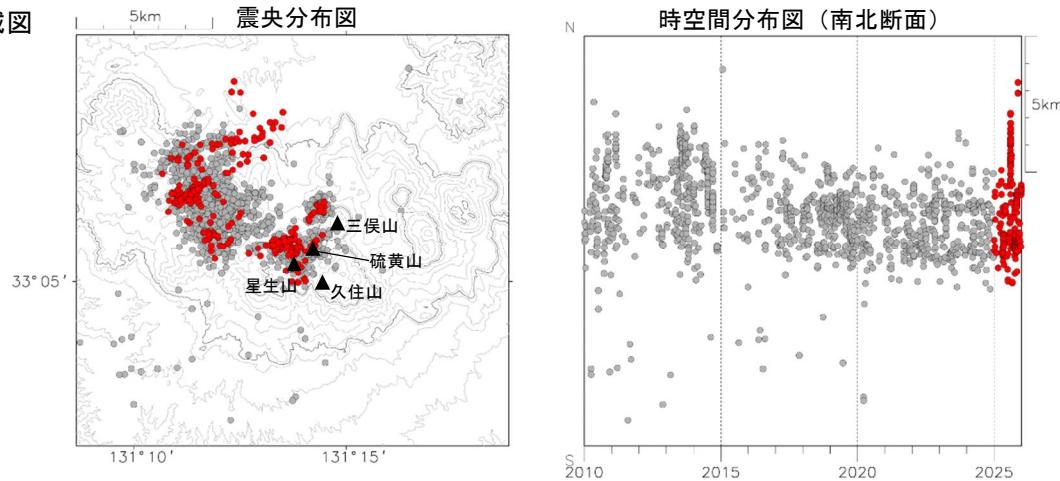


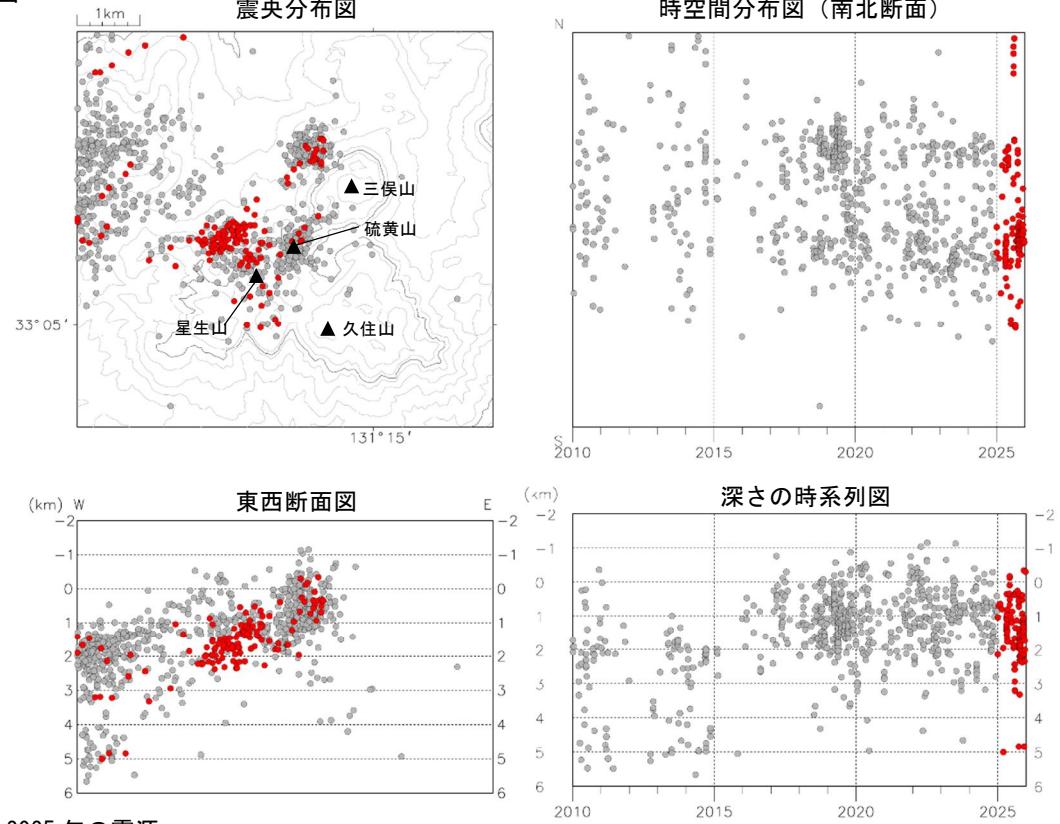
図 3-2 九重山 B型地震の日別回数及び、地震の波形例（2025年1月～12月31日）

12月には硫黄山付近と推定されるB型地震が時々発生しました。

① 広域図



② 狹域図



● : 2025 年の震源

○ : 2010 年 1 月～2024 年 12 月の震源

図4 九重山 震源分布図 ①広域図 ②狭域図 (2010 年 1 月～2025 年 12 月)

<2025年の状況>

- ・震源が求まった火山性地震は、主に硫黄山と星生山周辺のごく浅いところから深さ 3 km 付近、及び三俣山北西の深さ 0 ~ 2 km 付近に分布しました (②狭域図)。
- ・その他に震源の求まった地震は、主に星生山の北及び北西 2 ~ 7 km の深さ 1 ~ 6 km 付近に分布しました (①広域図)。

※火口周辺の一部の観測点が障害となったため、2020 年 7 月 8 日から 12 月 9 日にかけて震源の精度が低下しています。

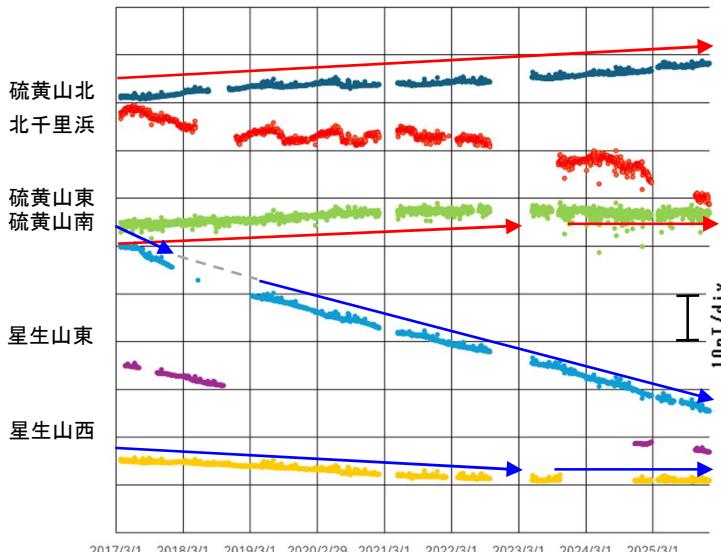


図 5-1 九重山 連続観測による全磁力の変化
(2017 年 3 月～2025 年 12 月)

全磁力観測では、長期的に噴気地帯北側の観測点で全磁力値が増加傾向、噴気地帯南側の観測点で減少傾向が継続しています。この全磁力の変化傾向は硫黄山付近の噴気地帯地下で温度上昇（熱消磁）が起きていることを示唆しています。2023 年頃から一部の観測点で、変化は鈍化しています。

連続観測：星生山南東約 4 km の全磁力値を基準とした場合の各観測点における全磁力日平均値。連続観測の各観測点における空白部分は欠測を示しています。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帶磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側 A では地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側 B では強められて大きくなることがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。



図 5-2 九重山 全磁力観測点配置図及び噴気地帯（A～D領域）の位置

連続観測点における 2017 年以降の傾向を「■（増加傾向）」「■（減少傾向）」「■（傾向なし or データ不足等により傾向不明）」でそれぞれ示しています。

赤破線で囲まれる領域は、硫黄山付近の噴気地帯の位置を示します。

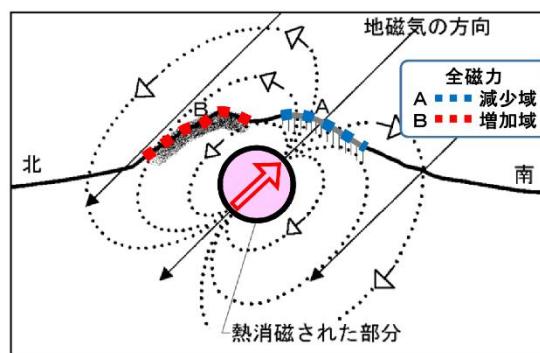


図 5-3 九重山 熱消磁に伴う全磁力変化的モデル
火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で增加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で增加	帶磁	低下

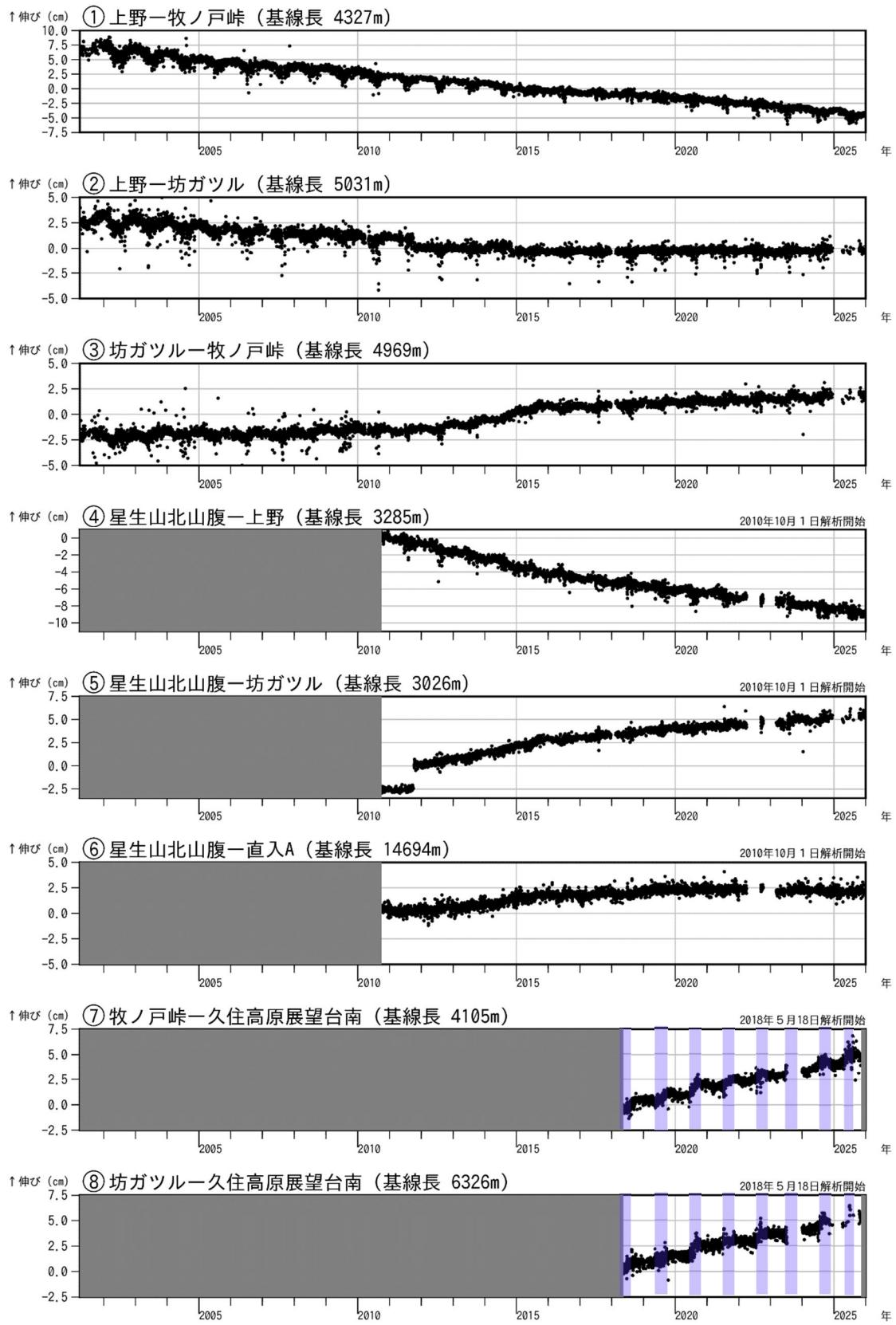


図6 九重山 GNSS連続観測による基線長変化（2001年4月～2025年12月）

GNSS連続観測では、2021年4月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図7の①～⑧に対応しています。また、基線の空白部分は欠側を示しています。
2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかつたため、この地震に伴うステップを補正しています。

⑦や⑧の基線の青色の期間の変化は、九重山周辺のまとまった降水による影響と考えられます。

（国）：国土地理院

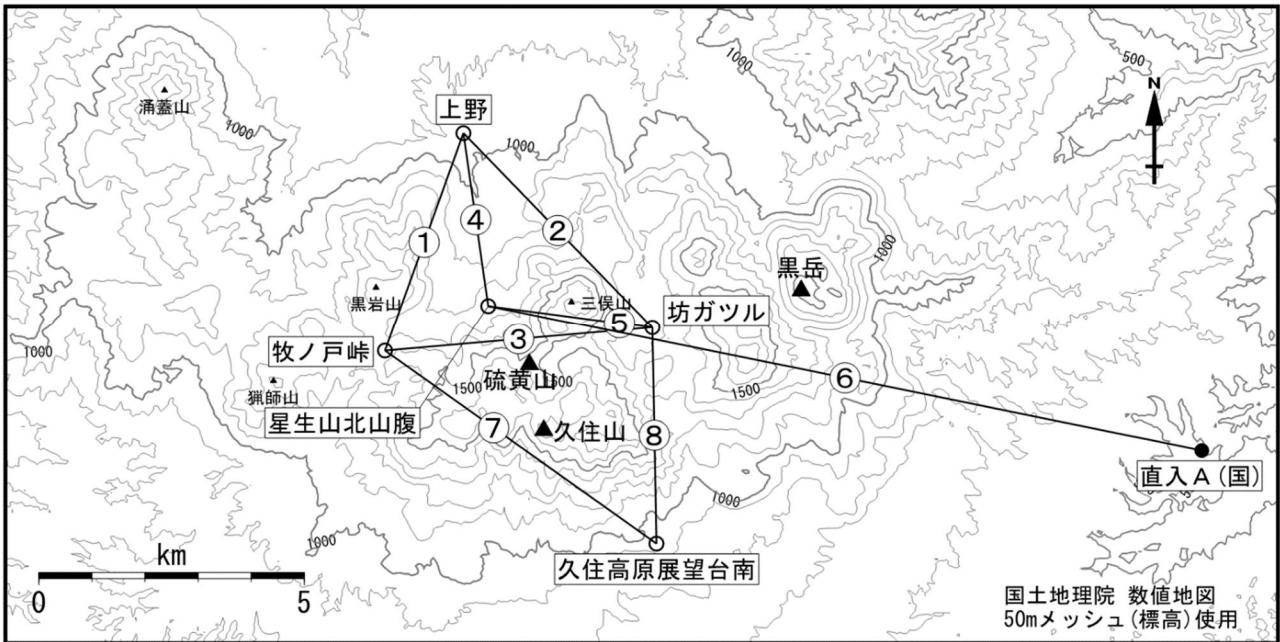


図7 九重山 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

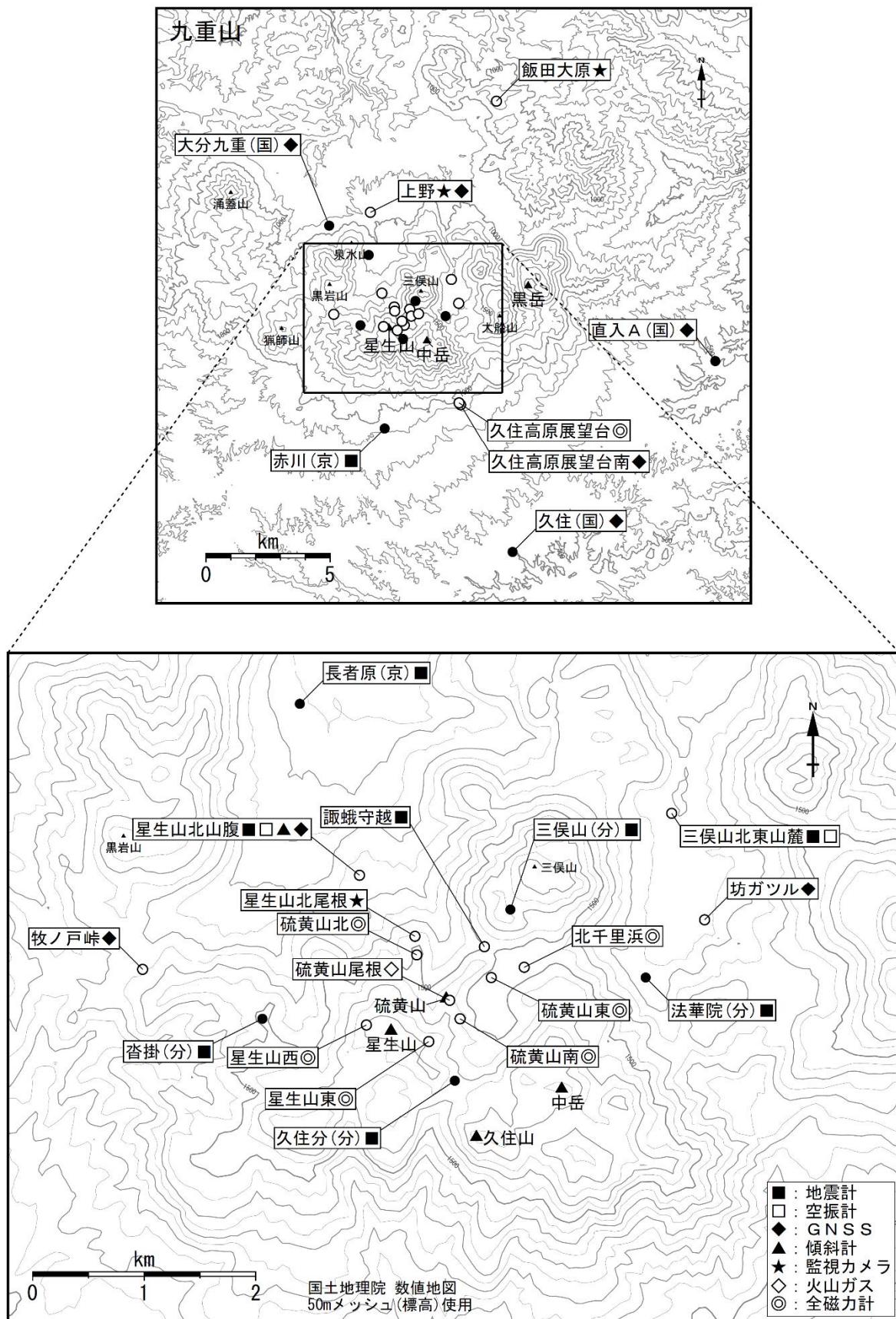


図8 九重山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(分) : 大分県

表1 九重山 気象庁（火山）観測点一覧（緯度・経度は世界測地系）

測器種類	観測点名	位置			設置高(m)	観測開始日	備考
		緯度 (° ′)	経度 (° ′)	標高 (m)			
地震計	星生山北山腹	33° 06. 20'	131° 13. 78'	1,282	-98	1999. 2. 18	
	諏訪守越	33° 05. 85'	131° 14. 50'	1,501	-3	2016. 12. 1	広帯域地震計
	三俣山北東山麓	33° 06. 50'	131° 15. 58'	1,199	-1	2017. 3. 22	臨時観測点
空振計	星生山北山腹	33° 06. 20'	131° 13. 78'	1,282	2	2010. 8. 2	
	三俣山北東山麓	33° 06. 50'	131° 15. 58'	1,199	1	2017. 3. 22	臨時観測点
GNSS	星生山北山腹	33° 06. 20'	131° 13. 78'	1,282	3	2010. 10. 1	
	上野	33° 07. 96'	131° 13. 48'	982	4	2001. 3. 1	
	坊ガツル	33° 05. 98'	131° 15. 77'	1,234	2	2001. 3. 1	
	牧ノ戸峠	33° 05. 74'	131° 12. 53'	1,337	3	2001. 3. 1	
	久住高原展望台南	33° 03. 77'	131° 15. 82'	936	1.5	2018. 5. 17	臨時観測点
傾斜計	星生山北山腹	33° 06. 20'	131° 13. 78'	1,282	-98	2011. 4. 1	
監視カメラ	上野	33° 07. 96'	131° 13. 48'	992	8	1998. 3. 1	
	星生山北尾根	33° 05. 90'	131° 14. 10'	1,489	2	2016. 12. 1	可視及び熱映像カメラ
	飯田大原	33° 10. 38'	131° 16. 75'	1,201	7	2019. 11. 1	
磁力計	硫黄山北	33° 05. 81'	131° 14. 11'	1,509	2	2017. 1. 1	
	北千里浜	33° 05. 75'	131° 14. 73'	1,466	2	2017. 1. 1	
	硫黄山東	33° 05. 70'	131° 14. 54'	1,463	2	2017. 1. 1	
	硫黄山南	33° 05. 50'	131° 14. 36'	1,571	2	2017. 1. 1	
	星生山西	33° 05. 47'	131° 13. 82'	1,705	2	2017. 1. 1	
	星生山東	33° 05. 39'	131° 14. 18'	1,680	2	2017. 1. 1	
	久住高原展望台	33° 03. 81'	131° 15. 78'	943	2	2017. 1. 1	
火山ガス	硫黄山尾根	33° 05. 59'	131° 14. 30'	1,559	1	2017. 1. 1	